



変えるために 変わらないうこと

西郷村立羽太小学校長
中畑 満

深雪せる野路に小さき沓の跡
われこそ先に行かましょもの
「林芋村」の歌と出会った
のは、木川達爾氏の著書である。
長野県が教員採用試験の受験者
に歌の意味を問うたこと、加え
て氏の思いが詳述されていた。
「林芋村の生涯」を平谷村教育
委員会が公刊したのは平成三年
十月。山の子どもにいのちをか
けた林芋村「われこそ先に」と
題したその本は、それから間も
なくして手にすることができた。
芋村は雅号、本名は芳弥と呼
んだ。近衛兵の除隊後、役場の
吏員に雇われていた。が、大正
二年四月、教員の足りない信州
の僻地校の教員に乞われる。
二十八歳の代用教員は老母を
背負い、青雲の志を胸に、標高
千メートルに近い新天地に赴任
する。村有地の原野を譲り受け
無一文の彼は、山小屋風の家を
自分で建てて仙人のような暮ら
しを始める。

開墾地に麦や馬鈴薯などの作物を栽培し食料を補う一方、桑を植え蚕も飼う。赤貧の生活の中、十六年間を、純粹にひたむきに、子供の教育に打ち込む。だが、不運な事故で生涯を終えるのである。

春雨の煙れる中に白々と
向かひの山にこぼし咲く見ゆ
一日の業をなし終へて鉄洗い
足洗うなり夕顔白し
安月給から書物求め、万葉集や古典を愛読する一方、労作を尊び、自然を慈しむ芋村であった。そのみずみずしい感性と情の厚い涙もろい、感激家の彼は計り知れない感化力を及ぼすようになる。
教師が変われば、子供は変わる。子供が変われば、学校は変わる。学校が変われば、家庭や地域は変わる。二十一世紀の教育改革はこの論理を欠いては始まりようがない。その教師はどうあるべきか。今、忘れかけている原点をこの本は思い起こさせてくれる。
零度以下二十幾度の雪の朝
一年の子の泣きつ来りし

本 の名称…われこそ先に
著 者 名…平谷村教員委員会
発 行 所…長野県下伊那郡
平谷村平谷教育委員会
発 行 年…一九九一年十月一日

心に残る

澄む心

県教育庁義務教育課指導主事
糞田 祐子



「お母さん、今日のご本ね」
布団に入り、二人の娘たちに
囲まれてそれだけが選んだ絵本
を読み聞かせするのだが、我が家
の就寝前の日課となつて、い
歩き始めた息子のいたずらに娘
たちと奇声を上げながらも心
む一時である。
「からすたろう」は、最近文字
が読めるようになってきた二番
目の娘が、不思議そうに抱えて
きた絵本である。ページをめく
るたびに娘の「どうして？」が
続く。
「どうしてこの子かくれてるの」
「どうしてこの子お話ししないの」
「どうしてこの子一人なの」……
その一つ一つの問いに上の娘と
一緒に考えていく。
この絵本の主人公「ちび」が
磯辺先生と出会い、クラスの中
で次第に存在感をもつてくる
と、娘たちの表情は期待に満ち
てくる。学芸会の場面では、か
らすの鳴き声を身近な家族に例
をとりにながら「ちび」になりき
ってまねるのである。
「赤ちゃんからすはター君の声ね」
「お母さんからすはお母さんの
声ね」そうして、娘たちは私の
両腕につかまりながら、私がか
ねる「ちび」が住む遠いお山に

いるからすの声に耳を澄ます。
担任の磯辺先生は「ちび」の
ありのままの姿を自然体で受け
止め信頼関係を築いていく。そ
して、周囲にも「ちび」の存在
を強く印象づけていく。先生の
機会をとらえた的確な指導に胸
がすく思いだ。さらに、「ちび」
や先生の思いを受け止めた周囲
の子共たちや地域の人々の心の
交流に、私の心も温かくなる。
卒業時には皆勤賞を受け取り、
その後も自信をもって生きる
「ちび」の姿に改めて教師のか
かわりの大切さを感じる。
我が子に布団をかけ、寝顔を見
つめながら、我が子とともに、
全ての子供たちが自分らしく、
そして、たくましく成長してほ
しいと心から願う。
「からすたろう」の絵本を読む
時、母として、教師としての自分
を振り返り、心が澄むのである。

本 の名称…からすたろう
著 者 名…八島太郎
発 行 所…偕成社
発 行 年…一九九五年
本コード…ISBN
978-4-03-001